
オレニ天使はイラナイ

ガム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレ二天使はイラナイ

【NZコード】

N1288A

【作者名】

ガム

【あらすじ】

北條学園2年天崎刹那は無類の女好き。その所為で三つの呪いを受けてしまつことに

プロローグ

俺は北條学園高等部2年天崎刹那。無類の女好きで相当の煩惱の持ち主だった俺は横で美女とすれ違えば飛びついで匂いかいだり思わず手を伸ばしていろいろイタズラしていた・・・だが実際にやるのではなくすべて頭の中でやっていたのだ。この人並みはずれた煩惱を強靭な精神力と体力で押さえつけて何とか妄想で我慢していた。だがこの行き場を無くした煩惱は俺の肉体を離れなんと天界（天使や神が住んでいるところ）まで流れ込んでしまったのだ。天界はエネルギーが具現化しやすい所らしくとてつもないエネルギーを持つた俺の煩惱は形を作りなんと天使たちにとんでもない猥褻行為を幾度となく働いてしまったのだ。そのおかげで俺自体は全然悪くないはずなのに天界での第一級犯罪者になってしまった。

俺の煩惱のエネルギーは何度倒してもすぐまた天界に流れ込んでいるらしく倒しても倒してもきりがないらしい。そこで元を正せばいいと天使が俺を抹殺しに舞い降りてきた。そこで今までの話を聞かされた俺は

「俺には妄想する権利すらないのか！！」

と講義したところアッサリと

「ない」

つて答えられてしまつたのだ！なんて理不尽な・・・。だが殺すのはちょっと可愛そうだと神が言つたらしく何個か呪いを受けただけですんだ。だがこの呪いが酷いモンだった。

第一の呪い・・・。女の子に与えた刺激が何十～何百倍にもなつて帰つてくる。つまり道で女の子に肩がぶつけたりしたら相手はよろけるだけだがこつちは相手が感じた何百倍もの衝撃が体を襲うのだ、当然肩は骨折しまくりだ、まあこれは敵意がなければ発動しないらしい

第二の呪い・・・俺に対してだけ女の子の力がこれまた何十～何百倍にもなる。つまり今までちょっとぐらい女の子に殴られても全然平氣だつたが今は背中を少し押されただけで相当に吹つ飛ぶ。

第三の呪い・・・これが一番酷い。俺の深層心理に女性は怖い生物だと刷り込まれた。怖くない怖くないと理性では分かつているのだが本能が怖がつてしまふのだ。これらの呪いのおかげで幸か不幸か煩惱が弱まってきて天界の被害が減少したらしい。しかし事と場合によつてもっと呪いを増やすこともあるそうだ。

だが俺は女の子が好きだ。こればつかりは何されようが変わらない。しかしこれだと彼女を作るどころか女の子と仲良くもできないまことに生き地獄だ。

そこで俺は思つた。呪いをかけてきた天使をぶつ倒してしまえば呪いが解けるのではないかと・・・これでも体力と腕には少し自信がある。天使の一人ぐらい死ぬ気になれば倒せるだろう。しかし問題があつた、呪いをかけてきた天使が女の子の天使だつたのだ・・・

しかも俺好みな
・・・・・

プロローグ（後書き）

「自分でもビックリ」の続きを書く気が起ら「こんなお話を書いてしまいました・・・」「面白そう」「つまんなそう」みたいに簡単なことでもいいので感想くれると助かります。よろしくお願ひします

天使アルト

呪いをかけられた日から三日経った朝、窓越しに見える空は晴れ渡り、雲が美しい模様を描いている。それとは裏腹に憂鬱で夜も眠れず昼寝して学校にも行つてない。今日辺り登校しておかないと流石にまずい気がする。

この部屋には朝だというのに俺のほかに一人余計な人物がいた。俺に呪いをかけ張本人だ

「つてかさー、いつまで家に居座る気だよこのダメ天使」

「な、ダメ天使つて・・・刹那つて失礼な人間だね」

この天使の名前は「アルト」。なんでも天界屈指の呪術使いで一千以上の呪いを扱えるらしく、神から俺を監視するように言われているらしい。でもなぜか俺の部屋にあるプロレスのビデオばっか観ている。

「おいそれはまだ俺も観てないビデオなんだぞ勝手に観るなよ」

「けつちいな刹那は。でもやつぱりスポーツ観てるとスッキリした気分になるね、ボクも何か本格的にスポーツ始めようかな?」

「イツ自分のこと」をボクとか何とか言つてゐがれつとした女の子だ。金髪碧眼で髪が長くポニーテールにしてゐるが腰辺りまで金髪が届いてゐる。幼い顔して出るとこは出でるんだよな……体も無駄な脂肪が見当たらぬし引き締まつてゐると思つ。服装が驚く、白いワイヤーシャツ一枚にジーパンと手の甲と手首だけを覆うを薄い皮のグローブこれだけだ、グローブなんか付けてストーリートファイトでもする気がよは……

「言つとくけどナビなプロレスはセンターインメントなんだよ。スポーツじゃない」

「何言つてんのさ? プロレスはスポーツだよ、ほら今だつてバットとボール使つて! 野球をしようとしてるじゃないか?」

「!! 野球つて何だよ? あのバットは凶器なの! あれで相手を殴るんだよ、悪役レスラーはリング場にいる時スポーツマンシップの欠片もないんだから」

「え、 そうなの? 野球でも始めるかと思つたのになあ…… そうだ刹那プロレス技かけさせじよ」

とか言いながらひりひりに近づいてくる

「断る! いいかそれ以上に近づくなよ! 僕に触れるなんてもつての他だ! 呪いの所為で3メートル以内に女の子が近づいただけで鳥肌

が立つのに・・・触れられたりしたらどうなる!・?せつと氣絶するぞ。しかもプロレス技?殺す氣か俺を!」

呪いのおかげで女の子から俺へのパワーが数十倍から数百倍になる。そんなんプロレス技食らつたらカウントを数えずにお陀仏だ

「いいじゃんいいじゃんお願いだよ~」

「そういうのはなあレスラーか健康な呪いを受けてない人に頼め!」

「何だよケチ!ケチケチケチケチ刹那のケチ!~!」

「ケチで命が護られるなら俺はいくらでもケチになるぞ!」

「あーそーですかーもうこーよー~ずっとピートオ観てるからー!」

「何すねてんだよ・・・」

ホント何なんだこの天使は?俺に呪いをかけた凶悪(?)な奴の癖して親しげに話しかけてくるし・・・何もしていなければすつごく可愛いんだけどな・・・今だつて正座しながら真剣な表情でプロレス観てるし(笑)・・・髪の毛なんか陽の光が当たるとキラキラ輝いて昼間でも光る星のよつだし。

・・・・・

「ちよつとー、わざわざから何ジーっとボクの」と見てるのを…では
ボクでエツチなこと想像してたでしょ…」

フツと我に返る。俺そんなにジーっと見つめてたのか？・・・・・

「なーに安心してくれ俺は子供には興味ないんだ」

とつあえず適当に流す。もちろんアルトをお子様だなんて思つてい
い。

「なに…？子供扱いしないでよ…！」

それが逆鱗に触れてしまつたらしい

アルトは怒つた様子で勢いよく立ち上がつた。そのため反動でプル
ルーンと激しく揺れた胸を俺は条件反射でつい凝視してしまつた。
ボタンをちゃんと閉めていないシャツのため揺れた拍子に谷間が見
える・・・しかも一着しか着てないから形がなんとなくだが分か
つた。やっぱ結構大きめのサイズだ・・・・つてか下着ぐらい付け
るよな・・・

「あ～～っ！…やっぱり胸、ぱっか見てるじゃないか！…刹那の変態！
これじゃまた天界に被害が出ちゃうじやん！」

「そんな事言われてもなあ・・・」

呪いをかけられて女の子が恐怖に感じてしまつはまんなのこれでも胸に反応するなんて我ながらいい度胸だ

「！」一なつたら呪いを増やすしかないねー三つじゃ刹那には甘かつたんだよー」

何！？呪いを増やす！？冗談じゃないぞーこれ以上得体の知れないモン増やされてたまるかよ

「い、今のは悪かったよ。」「メンナサイ・・・」

俺は誠意を表すために深々と頭を下げた。

「・・・よーし今だ！」

と、突然アルトは頭上から俺の腰に腕を回し俺の体を宙に持ち上げた。

「つておーーー向すんだよー？離せーーー」

「あんな真面目に謝っちゃって……刹那は面白いなあ。ボクだって子供じゃないんだからそんなすぐ本気で怒つたりしないよー」

「な・・・・だつたら今すぐ子の手を離せ……」

「やーだよつ。一回やつてみたかつたんだもんパワー・ボム」

パワー・ボムとは相手の腰を掴み一気に持ち上げこれまた一気に床に叩きつける極悪技である

「そつれーえつ！」

俺は勢いよく振り下ろされ頭から床に衝突した。床が砕け俺の体が半分床に埋まってしまった。コンクリート造りの家のはずなのにとんでもない威力だ。俺の体を通じただけでこれほどまで破壊力が上がるとは……俺もそろそろ意識を保つのが限界だった

「うあわ・・・・」「メンゴメンちょっとやりすぎちゃった・・・・。ちなみに怒つたのは嘘だけど呪いを増やすつてのは本当だからね。刹那には悪いけど呪い三つじゃまだ足りないみたいだからさ」

ちょっとやりすぎでこれかよ・・・・もうなかばどうでもよくなつてきた・・・・普通の人間だつたらもう死んでるぞこの状況は・・・

・・体鍛えてて本当に良かつた良かつた・・・

つて呪いを増やすつて言つのは嘘じゃなかつたのかよー！

天使アルト（後書き）

執筆中は楽しかったのですがいざ出来上がりみると何だこれ？って感じになっちゃいました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1288a/>

オレニ天使はイラナイ

2010年10月31日11時37分発行